様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７００４３

研究課題名（和文）道教の普渡儀礼の成立と現状

研究課題名（英文）The formation and the present situation of Daoist Universal Salvation

研究代表者
松本　浩一（MATSUMOTO, Koichi）

筑波大学・図書館情報メディア系・教授

研究者番号：００１６５８８８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、宋元時代に成立した二つの儀礼書に記述された道教の普渡儀礼について、基本的な構成を明らかにし、さらに主要な救済の対象である正薦の亡魂に対する一連の儀礼と比較しながら、儀礼書の儀礼構成や思想的な特色を考察した。さらに仏教の施餓鬼儀礼が普渡儀礼としての性格を有するようになる過程と、道教の普渡儀礼が成立する過程をたどりながら、仏教と道教が相互に影響しあいながら、ぞれぞれの普渡儀礼を形成していったことを明らかにした。また現在台湾や香港などで行われている普渡儀礼について、現地での調査を行い、特に台湾北部道士の中元普度について、手印に注目してその構成・特色を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In this research, we investigated the structures of Daoist Universal Salvation rituals in two liturgies which described Yellow Register Retreat sentences, and comparing with the rituals for the soul of the deceased person who are the main object of salvation by performing Yellow Register Retreat, considered the characters of the structures of rituals and the basic thoughts of each liturgies. And we investigated the processes in which Buddhist rituals of the offering food to the hungry ghosts developed to the Universal Salvation, Daoist Universal Salvation rituals were formed, and Buddhist and Daoist Universal Salvation ritual of one’s own were formed mutually influencing each other. We also observed Universal Salvation rituals which are performed in Taiwan and Hong-Kong now, especially investigated the ritual process of and the mudras in the Universal Salvation ritual performed by Daoist priests in Northern Taiwan.

研究分野：中国宗教史

キーワード：哲学　道教儀礼

１．研究開始当初の背景

(1)普渡は成立以来中国社会で重視されてきたが、普渡がもともと仏教内部で生まれ、道教がその影響を受けて普渡儀礼を整備したと単純には言えないことは、すでに研究代表者らによって指摘されている。一方で孤魂・厲鬼に対する信仰は、普渡儀礼成立以前からしばしば言及されており、彼らの供養は特に雨を祈る際などには重視されてきた。道教でも唐末五代の道士杜光庭の『太上黄籙斎儀』では、すでに普渡を目的とする儀礼も説かれているが、まだ独自の構成を持った儀礼とはなってはいない。普渡の考え方がはっきりと表現された儀礼が登場するのは宋代からであり、この時代から元代にかけて成立した『無上黄籙大斎立成儀』（以下「立成儀」）、金允中『上清霊宝大法』（以下「金氏大法」）、『霊宝領教済度金書』（以下「済度金書」）のような大部の儀礼書それぞれには、普渡儀礼が記述されている。

(2)これらの儀礼書に記された普渡儀礼は、道教の普渡儀礼の出発点と位置付けられるので、現在中国各地で行われている普渡に関する研究書や報告書の中で、しばしば言及されてはいるが、簡単な記述にとどまっている。そして儀礼書に記された普渡儀礼それ自身についての考察は十分に行われてはいない。その源流とされる仏教の普渡儀礼との関係も、明らかにされたとはいいがたい状態であり、宋元時代の儀礼書に見える普渡から、現在見られる普渡への変遷をたどる作業も試みられてはいない。さらに現在大規模な醮祭や仏教の水陸斎の中で行われる普渡や、あるいは中元節の時に行われる普渡への参加者が、どのような目的でそれに参加しているのか、またこれらの儀礼が成立した宋元時代とどのような変化があるのかという、いわば普渡儀礼の社会的背景という点についても、充分な研究が行われてはいない。

２．研究の目的

(1)そこでまず本研究では、宋元時代の儀礼書に記された普渡儀礼の内容を分析し、儀礼書による共通点・相違点を明らかにすることを目的とする。普渡は死者の霊魂を地獄から解放する破獄から始まり、次に「召魂」、「疾病の治療」、「沐浴」、「呪食」、「錬度」、「伝符・授戒」という一連の儀礼を行う。各儀礼書ともほぼこの経過をたどるが、それぞれの儀礼書で儀礼の順序や、各段階で焼却する符、その際に唱える呪文、各儀礼の目的などを神々や死者に告げる宣言文等の内容が異なっており、そこにそれぞれの儀礼書の特色が示される。これを明らかにすることが第一の目的である。

(2)この時代の文人は、公的な目的やあるいは親類縁者・友人などのために行った各種の道教儀礼のために、その目的や祈願を記した青詞・疏文を残している。これらはどのような目的で道教儀礼が行われていたかを考察する好個の資料を提供している。特に『全宋文』にはそれらが網羅されているので極めて有用であり、今回はそこに収められた南宋時代の文人の残した青詞・疏文を電子化し、普渡にかかわる記述の見えるものを分析することにした。黄籙斎は死者を救済するための斎儀であるが、特定の人物のために行われた黄籙斎のための青詞・疏文にも、しばしば普渡の目的が記されている場合がある。しかしこの時代の青詞・疏文には、仏教の普渡や水陸斎のために書かれたものも多く存在し、むしろ仏教儀礼に関するものの方が多い。そのためここでは両者を考察の範囲に含め、これらを手掛かりにこの時代の普渡に対する考え方や、孤魂・厲鬼に関する信仰を探っていく。これが第二の目的である。

(3)普渡は現在中国各地で復活し行われるようになってきているが、断絶することなく行われてきたのは台湾・香港等の地域で

ある。そして各地の普渡儀礼は、それぞれ伝統を異にするいくつかの系統のものを伝えている。従来から研究代表者は台北市や台南市周辺の普渡について、調査を進めてきているが、一つには自身で普渡のある局面に注目した研究をすすめるとともに、すでに発表された研究と自身の調査によって、香港などの地域を含め様々な伝統の儀礼を把握し、全体像を把握することに務める必要がある。また普渡への参加者の意図・目的については、前記のように宋代の青詞・疏文とともに、現状を調査することがもっとも有効であり、その結果を宋代の資料を解釈する際にも適用することができる。

３．研究の方法

(1)宋元時代の普渡については、儀礼書をワープロに入力し、一つ一つの儀礼について、唱えられる呪文、使用される符、読誦される宣言文、そして儀礼書の中で解説される儀礼の位置づけ・意味について、細かい分析を行っていく。また道士が自身で用いたり、亡魂に与えたりする文書については、儀礼書の他の部分にまとめて示されている場合も多く、それらについても同様に考察していく。また儀礼の中で読誦する文章が経典から引用されている場合や、他の部分と関連している場合は、儀礼書と経典、あるいは儀礼書のある部分と他の部分、それぞれにおける同様の文章の位置づけの違いに注目しながら考察を進めていく。そして儀礼全体の中での、それぞれの儀礼の位置づけについて検討する。

本研究では、特に研究過程の中で、黄籙斎を挙行する本来の救済対象（祖先など）のために行われる一連の儀礼である正薦と、孤魂を対象とした普渡の中での、それぞれを構成する個々の儀礼を相互に比較するということを行うに至ったため、比較に際しては、記述スペースの多寡とその理由の考察、および構成と使用する文書・呪文・符などの違い、そして宣言文の内容等に注目して分析を行っていった。

(2)現行の儀礼については、先行研究を踏まえた上で、はじめに儀礼をビデオに収め、次にビデオを見ながら儀礼テキストとの対応を確認し、必要なところではテキストの読み方について道士に確認する。そして個々の儀礼の意味や、使用する符や呪文の意味に関しての聞き取りを行う。今回は特に手印に焦点を当てたので、個々の印の結び方と、その意味についての聞き取りを行った。

(3)青詞・疏文については、テキストマイニングによる分析なども考えていたが、分析が一部にとどまったので、従来通りそこから儀礼を挙行する目的を読み取っていった。

４．研究成果

(1)宋元時代の儀礼書の分析。

「立成儀」は『無上黄籙大斎立成儀』という正式名称が示すように黄籙斎についての儀礼書であるが、今回注目したのは死者のために特別に行われる一連の儀礼で、杜光庭の儀礼書にはなかった部分である。その中でも普渡に注目して分析を進めていたが、「立成儀」の普渡儀礼を分析する過程で、その由来などを考察するためには、正薦の儀礼と、比較しながら考察する必要があることに気付いた。そのためこの考察が予定していたより長くかかり、またこの成果をまとめた論文も本来予定していた量を大幅に超えてしまった。しかし細部まで詳細に考察したところに、この論文の意義があると考えていたので二篇に分けることにし、「立成儀」の普渡を考察した論文と、普渡と正薦の儀礼を比較しながら考察した論文との二篇を完成した。なお二篇に分ける以前の成果は、26 年 10 月の大東文化大学での「道教の普渡と葬儀の形成について」と題した招待講演で発表した。

「『無上黄籙大斎立成儀』の普渡」では、

はじめに北京や上海あるいは台湾・香港など現在中国各地で行われている普渡についての報告・研究を概観し、宋元時代の儀礼書について言及しているものは多いが、専門に研究した研究は少ないことを指摘した。次に「立成儀」成立について論じた研究を紹介した後、上記の部分に分けて、その儀礼内容を細かく分析したが、「施食」、「錬度」、「伝符・授戒」に関しては、更に細分して考察を行った。そして仏教の普渡儀礼と比較しながらその特色を考察し、儀礼の構成については類似したところがあるが、道教では符と呪文が重視されるが、仏教では手印と真言（呪文）が重要であること、道教では冥界の官僚組織の存在を前提とした、各種の文書や証明書の発行とその手続きが重要な位置を占めていること、「疾病の治療」や「沐浴」、「錬度」は、中国の民間信仰や道教独自の発想を反映した儀礼であること等を、例を挙げて指摘し、最後に仏教に倣って道教の普渡が形作られたことは従来指摘されてきた通りではあるが、仏教の普渡にも中国的な要素が見られ、実際には相互に影響しあいながら普渡儀礼が成立してきたのではないかと指摘した。

「『無上黄籙大斎立成儀』の普渡と正薦」では前論を受けて、「立成儀」の普渡儀礼と比較しながら正薦の各段階の儀礼について考察していった。はじめに道教の葬送儀礼に関する研究を紹介し、次に普渡に関する論文では取り上げなかった「破獄」について、それが黄籙斎の主要な救済の対象（すなわち正薦儀礼の対象）の功徳とするために行われることを指摘した。そして「召魂」儀礼以下では、はじめに正薦での儀礼の概要を紹介した後、普渡での同様の儀礼との比較を行っていった。各儀礼の比較では記述している量（すなわち記述に費やしている葉数）を手掛かりにしたが、「召魂」・「沐浴」については普渡も正薦もほとんど変わりないが、「疾病の治療」と「施食」では普渡のほうが多く、特に「施食」では普渡が3倍近いことを指摘し、その理由について、考察していった。「錬度」、「伝符・授戒」では正薦のスペースの方が多いが、この部分は道教的な特色をもった儀礼と考えられる。そして以上のことから、道教が仏教の普渡儀礼を参考にして普渡を構成した後、道教的な色彩を持った「錬度」や、行政的手続きを主とする「伝符・授戒」を追加して主として祖先を救済する正薦の儀礼を構成し、それを普渡に及ぼしたという経過を推測した。

「金允中『上清霊宝大法』的普度與正薦」では、先論で「立成儀」の普渡と正薦を比較しながら、それぞれの構成の特色と成立過程を考察したのに続き、「金氏大法」について同じ作業を進めて、それぞれの儀礼書の特色について探ったもので、アメリカ・ワシントン州タコマにある「Pacific Lutheran University」で開催された、「日米道教会議」において発表したものである。ここでは結論として、次のような指摘をした：作者の金允中は普渡を極めて重視しており、黄籙斎を挙行するにあたっては孤魂の救済を心がけることが必要であることを強調している。この普渡の挙行が正薦の亡魂の功徳となり、その救済に貢献するという考え方は「立成儀」の考え方と共通である。説教において孤魂に関しては、まず人間に再生し、その後天堂に昇ることを目指すべきことが、正薦の亡魂に関しては昇仙の後、虚無に昇るべきことが説かれており、説教の内容も正薦の亡魂に対してははじめに教理を説き、次に教理に従って救済の道を説くという順序になっているのに対し、孤魂に対しては信仰に依る救済が強調される、というように力点の置き方が異なっている。金允中は民間信仰を反映した儀礼に対しては批判的で、功徳を積んで大道の恩

に与り、救済を得るという発想が、儀礼による処理や手続きによって救済を得るという発想に勝っており、この点で杜光庭等の斎儀の考え方を引き継いでいる。

当初の計画では、仏教普渡の考察は考慮に入れていなかった。しかし「立成儀」の儀礼を分析していく中で、道教の普渡儀礼の成立を考察していくには、仏教の普渡儀礼をともに考察することは不可欠であることに思い至った。そこで 27 年 12 月に香港・中文大學で開催された「比較視野中的道教儀式」國際學術研討會において、「佛教施餓鬼和道教普渡」と題した論文を提出し、仏教の施餓鬼儀礼が普渡儀礼としての性格を強めていく過程と、道教の普渡儀礼の成立過程を、相互の影響関係に焦点をあてて考察した。この論文では、はじめに不空の訳とされている三つの論文のうち、彼の訳と考えられる『仏説救抜焰口餓鬼陀羅尼経』と、実叉難陀訳『仏説救面然餓鬼陀羅尼神呪経』が施餓鬼経典の初めのものであり、『施諸餓鬼飲食及水法』は不空の訳ではなく、そこには普渡の考え方が現れており、真言の種類や如来の名号なども後の時代のものに近づいていること、宋初の遵式の文書に見えるものも施餓鬼とはなっていても実質上普渡に見られること、一方杜光庭の『太上黄籙斎儀』に含まれる「普度幽魂遷抜中分行道」などには、道教独自の構成の萌芽がみられること等を指摘した。そして「立成儀」についての研究成果と、これとほぼ同じころに成立していた『瑜伽集要焰口施食儀』により、仏教と道教の普渡文献がほぼ同じころに成立していると考えられることを主張した。そしてさらに普渡をさらに拡大させた性格を持つ、仏教の水陸斎について、唐代の状況を日本の『阿娑縛抄』「冥道供」から推測し、北宋後期に水陸斎の基本的構造が成立したとした。そして『法界聖凡水陸勝会修斎儀軌』に見える「十二類孤魂」の召請文の孤魂の記述が、金允中『上清霊宝大法』の「二十五類孤魂文」のそれと共通する部分が多いこと、また水陸斎の中の真言に道教の普渡の影響によって成立したと思われるものが見られることから、全体として仏教と道教は相互に影響しあいながら、それぞれ独自の普渡儀礼を形成していったと結論付けた。

また当初の計画では、宋代の黄籙斎や普渡のために書かれた青詞・疏文の総合的な分析を行う予定であり、25 年度に『全宋文』に収められた南宋の文人のものを入力した。しかしその中で分析を進めたのは周必大や楼鑰の著作など一部であり、そこでは黄籙斎の青詞・疏文として残されたものの中でも、普渡の意図を強調している部分が見られることが指摘できる。これらの分析内容は論文としてまとめるには至っていないが、その分析の成果は、26 年度に行った大東文化大学での招待講演で触れ、また 28 年 7 月に予定されている政治大学での招待講演にも反映させる予定である。

(2)現在の普渡儀礼に関する研究成果。

台北の道士の普渡儀礼については以前から調査を進めてきていたが、中元節の際に多く行われる北部道士が中普と呼ぶ普渡について、李游坤道長と連名で「台湾北部道士の中普と手印」と題する論文を提出した。はじめに現在の道教普渡儀礼の研究を概観した後、北部道士の役割と伝統について紹介し、次に中普の基本的構成を 16 の段階に分けて分析し、全真派の普渡テキストの構成や、台湾南部の普渡の構成と比較しながら、中普の特色について考察した。そして中普の中で見られる 14 からなる一連の手印について、それぞれの名称と意味、全体構成について考察し、仏教の影響は顕著であるが、救済の過程を時間軸に沿って表現しているのではなく、はじめに天地と道場という救済の場を表現し、次に神々や仏

の供養を表し、天尊の慈悲や救済の状況などの全体の図式を提示するという形式をもっていることを指摘した。

毎日台北府城隍廟で行われている超抜は小規模な普渡であり、祟りをおこしている霊魂を救済することによって、その祟りから引き起こされる病気などから解放されることを目的としている。その依頼者の意図を調査したデータを李游坤道長から提供されており、宋元時代の青詞・疏文の分析とともに行う予定であったが、この超抜だけでなく、中元節普渡の参加者の調査とともに分析を行いたいと考え、28 年度に行うことを計画している。台湾北部道士以外の現在の普渡に関しては、25 年度に台湾の禅和派などの普渡儀礼の調査を行い、その系統も調査したが、儀礼のテキストが手に入らず、分析には至っていない。26 年度には香港の正一派や潮州の仏教系の普渡儀礼などを調査したが、やはり成果の報告には至っていない。

(3)研究の総括として、はじめに宋元時代の儀礼書に記述された普渡儀礼の分析・考察については、当初計画していた「立成儀」、「金氏大法」について成果が得られたが、研究を進める過程で、さらに本来普渡を含む黄籙斎等の斎儀を行う目的である、ある特定の亡魂を救済するための一連の儀礼との比較研究の必要性に気づき、その研究を進めて上記二つの儀礼書について、成果を発表することができた。現在もう一つの研究対象であった「済度金書」についての分析を進めており、この成果については 7 月に湖南省で行われる国際学会で発表する予定である。この点では、当初の計画をさらに拡大した成果が得られたといえる。また仏教の普渡儀礼のことについては、青詞・疏文など祈願文の分析に関して言及しているだけで、仏教・道教における普渡儀礼の成立過程を、相互に比較しながら明らかにすることは計画していなかった。この点を追及した論文が香港の国際学会で評価されたことは計画外の大きな成果といえる。しかし南宋の青詞・疏文については、すべての電子化は完成したものの、分析は一部のものに対して行っただけにとどまった。現在行われている普渡については、香港や台湾で五種類の儀礼の調査を行うことができ、さらに台湾北部の中元普渡についての論文を発表することができたが、参加者についての調査については、データの分析にまで至れず、今後の課題として残された。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

①<u>松本浩一</u>、『無上黄籙大斎立成儀』の普渡、図書館情報メディア研究、査読有、13 巻 1 号、2016、pp.1-18.

②<u>松本浩一</u>、『無上黄籙大斎立成儀』の正薦と普渡、図書館情報メディア研究、査読有、13 巻 1 号、2016、pp.19-34.

③李游坤、<u>松本浩一</u>、台湾北部の中普と手印、東方宗教、査読有、第 125 号、2015、pp.1-24.

〔学会発表〕（計 3 件）

①<u>松本浩一</u>、金允中《上清靈寶大法》的普度與正薦、日米道教会議（Japan American Taoist Conference）、2016.3.29、Pacific Lutheran University（タコマ・アメリカ）

②<u>松本浩一</u>、佛教施餓鬼和道教普度、「比較視野中的道教儀式」國際學術研討會、2015.12.8、香港・中文大學（香港・中国）

③<u>松本浩一</u>、道教の普渡と葬儀の形成について、大東文化大学漢学会・招待講演、2014.10.25、大東文化大学（東京都板橋区）

６．研究組織

(1)研究代表者

松本　浩一（MATSUMOTO, Koichi）
筑波大学・図書館情報メディア系・教授
研究者番号：00165888